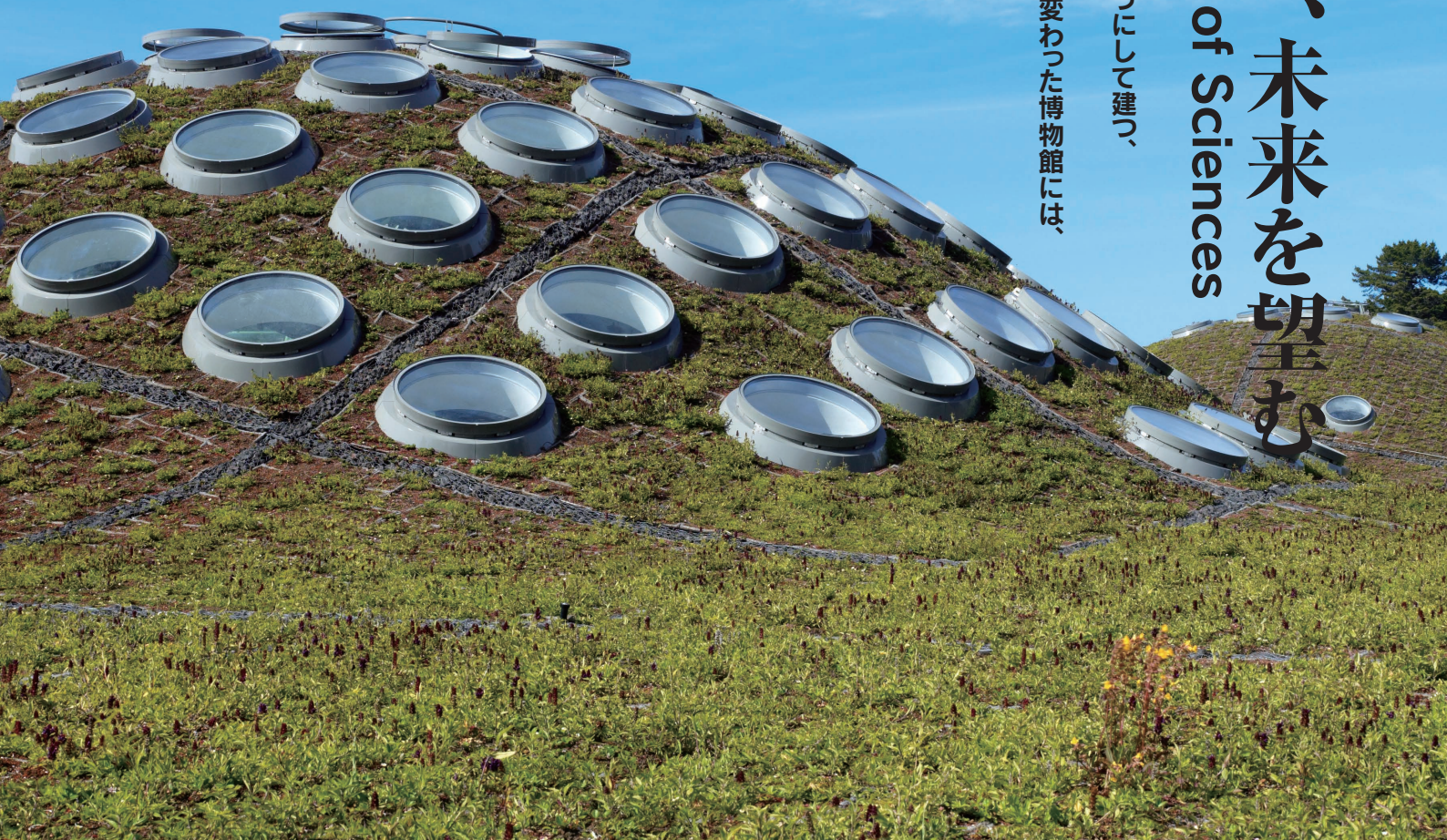


# 緑の屋上から、未来を望む

## California Academy of Sciences

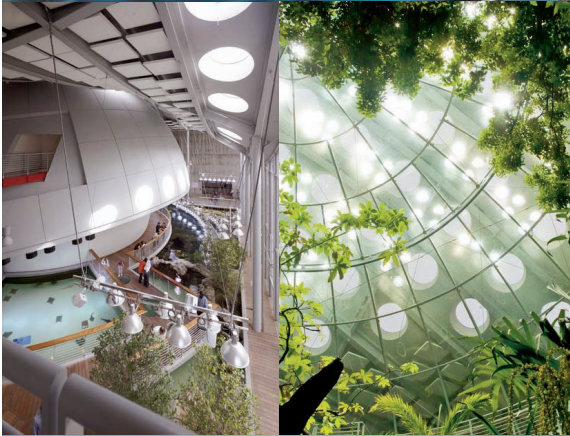
ゴールデンゲートパークの緑に包まれるようにして建つ、「生きている屋根」を持った真新しい施設。設立から150年余りの歴史を経て生まれ変わった博物館には、未来への知恵と希望が詰まっている。



「生きている屋根 (Living Roof)」—— 2008年9月にリニューアルオープンしたカリフォルニア科学アカデミーの屋根は、そう呼ばれている。イタリア人建築家、レンゾ・ピアノ氏が設計を手がけ、「サステイナビリティ」をテーマに掲げる施設の象徴だ。約1ヘクタールもある屋根にはカリフォルニアの野草が生い茂り、大きな建物を周囲の自然に調和させている。と同時に、雨水の活用や、建物全体の気温のコントロールにも寄与している。この建物には、ほかにも太陽エネルギーや高効率の水資源再生システム、リサイクルの鉄筋、古くなったジーンズの断熱材への活用など、さまざまな工夫が施されている。

「サステイナブルな人間の営みのあり方とはどのようなものなのか。この施設ができたことで、『理論的・技術的に何が可能か』ではなく、『私たちが今、何をしているか』を語り、訪れる人たちと共有することができる。それは大きな一歩だと思っています。スタッフの一人はそう話してくれた。「生きている屋根」に立つと、確かに未来へのイマジネーションが広がる——それも、ポジティブな方へ。「博物館」とは、未来を描く材料を提供する場でもあるのだと、あらためて思う。

大きな緑の屋根の下には、水族館とプラネタリウム、自然史博物館が一堂に集められている。世界各地の熱帯雨林を再現した直径90フィート(27・5m)の球形ドームに足を踏み入れると、しっとりと暖



緑化された広大な屋根に設けられたいくつもの丸い窓からは、陽の光がさんさんと降り注ぐ。水族館とプラネタリウム、自然史博物館が一堂に集められた館内には、ゆったりと、思い思いの時間を過ごす人々の姿がある。風や鳥が運んでくる種が芽吹く季節を迎えるたび、緑の屋根は姿を変えていくだろう。  
※博物館紹介はP46-47をご覧ください。

が満ちていた。  
(鷺尾 梓)

「こわいから……」。彼女が指差していたのは、電気ウナギと同程度の電流を触って体験することができる展示。こわこわと手を触れる私を見つめる彼女の表情は、まるでいたずらっ子のようなものだった。自ら操作したり、植物の陰に隠れている生き物を探したりと、参加・体験型の展示の多い館内には、互いに見知らぬ人同士がひそひそとささやき合ったり、いっしょになって歓声を上げたりする光景がそこかしこにある。建物全体に、わくわくした空気が満ちていた。

かい空気に包み込まれる。親子連れや車いすのお年寄りが、なだらかなスロープをゆつたりと上っていく。足下でゆらぐ水の中を、大きな魚が通り過ぎる。と、そのさ下に下に、階下から上を見上げている人の顔がある。何時間でも飽くことなく過ごしていられそうな、不思議な空間だ。  
「ねえ、あなた、これさわってみて」。水族館の中で、初老の女性に声をかけられた。「どんな感じがするのかわりたいけど、私はこわいから……」。彼女が指差していたのは、電気ウナギと同程度の電流を触って体験することができる展示。こわこわと手を触れる私を見つめる彼女の表情は、まるでいたずらっ子のようなものだった。自ら操作したり、植物の陰に隠れている生き物を探したりと、参加・体験型の展示の多い館内には、互いに見知らぬ人同士がひそひそとささやき合ったり、いっしょになって歓声を上げたりする光景がそこかしこにある。建物全体に、わくわくした空気が満ちていた。